説教20211107ヘブライ9：24-28マルコ12：38-44「神様のまなざし」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日はマルコ福音書にお金の話が出てきますので、お金の話から始めたいと思います。お金は、古くはもともと金や銀でした。それが今では紙となり又データーとなって、薄い財布やパソコンの中に保管されるものとなりました。又、カードによる決済が一般化して、お金の姿を見ることも昔よりもぐんと減ったのではないでしょうか。ただし、一つの例外の場所があります。それはここ教会であります。教会では献金する時に、私たちは必ずお金の姿を目にすることになるでしょう。今日のマルコ福音書でも、主イエスは、一人の貧しいやもめが、レプトン銅貨２枚を賽銭箱に入れる姿を見て、彼女に目をとめたのでした。

さて、お金には、二つの働きがあると思われます。一つ目はお金を支払うことで、人を自分の為に働かせたり、従わせたりする働きです。この働きは会社などでの労使関係に一般的にみられることです。そして二つ目はお金を支払うことで、人が自由にされる働きです。この働きは、人がレジャーを楽しむ時や、学校で学ぶときや、教会で献金をするときに観られる働きです。極端にいえば、一つ目は、人を隷属させ奴隷とする働きであり、二つ目は人を奴隷から贖いだし自由の身とする働きであります。贖いだすということは贖罪の贖の字にも用いられていますが、この贖うということは、人が身代金を支払って、奴隷状態から人を救い出すという意味でした。

さてお金のという一つのモノに、こんなに正反対の働きが併存しているのは驚くべきことですが、この世にあって、この二つの働きは混じり合いながらお金は働いているのではないでしょうか。

以上で現世的なお金の考察を終わりますが、さて私たちは、この地上生涯を終えてから入れられる天の国においては、お金を持っている者たちなのでしょうか。ヨハネの黙示録をひも解いてみますとどうやらそうではないようです。私たちが入れられる都の城壁は碧玉で築かれ、都は透き通ったガラスのような純金であった、と記されています。どうやら町中が純金で作り上げられ、そこには神の栄光が満ち満ちているのですから、別に私たち自身がお金を出してそれを買い求めるということもないようであります。また主イエス御自身が犠牲となって私たちをこの世から贖いだして下さったのですから、天の国では、もはや私たちはいちいちお金を払って我が身が自由にされるということもないのです。このように私たちの本国である天の国には、金と銀とが満ち満ちていますが、お金はないのであります。

私たちはこのことを覚える時、仮住まいであるこの世にあっては、お金を大切に用いながら、天の国へ旅立つ備えをしていきたいと願うことでしょう。さて、ヨハネ黙示録には次のような意味深長な神の御言葉が記されています。　　「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」

『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』というセリフは、今日のマルコ福音書に出てきます大勢の金持ちが口をそろえて言いそうなことですが、「私は金持ちだ」という部分は省いても、「私は満ち足りている。何一つ必要な物はない」ということは、私たち自身もつい思ってしまうことではないでしょうか。また世間では「私は満ち足りている。何一つ必要な物はない」と思いながらあの世へと旅立つのが一番幸せだという信仰もあるかもしれませんが、主イエスの信仰はそういうことではないのです。なぜならば私たちのこの世は仮住まいであるからです。仮住まいで完成してしまったら、そんなにくやしく、心残りのことはないのです。そして本国である天の国にこそ、まことのものがあるのです。神様のまなざしは、仮住まいする欠けばかりの私たちが、まことのものを目指して、天の国目指して羽ばたく姿に目を留められるのです。

このように私たちはこの世で、実際にお金持ちかどうかに関わらず、神様のまなざしを遮って、神様の恵みを受け取ろうとせず、自分自身で満足してしまったならば、天の国を見失ってしまう者となるでしょう。今日のマルコ福音書に出てきます律法学者もそのような一人だったのでありましょう。律法学者は自分の満足を得るために、神殿の境内で、金持ちたちと売り買いをして、お金を、人を隷属させる働きの為に用いていたのでしょう。その為、やもめの家は食い物にされ、貧しい暮らしを更に貧しくさせられたことでしょう。しかしそれでも貧しいやもめは、賽銭箱にレプトン銅貨２枚を入れるのです。彼女は、この時、私を自由にしてくださいという祈りをもって、主イエスにこのお金を捧げたのではないでしょうか。日々の生活でお金によって苦しめられている彼女が、お金を手放すことによって自由にされると思ったのは、或いは自然なことだったかも知れません。

そして、この貧しいやもめの姿も、この世でさまざまに打ちひしがれている私たち自身の姿なのでしょう。私たちはこの世にあって、あまりにも主従関係、隷属関係を生み出すお金の側面にまみれてしまって、このような自由を生み出すお金の側面を忘れてしまっているのではないでしょうか。しかし、自由を生み出すお金の側面は、この世にあってお金がもつかけがえのない働きであります。私たちは、見ず知らずの学生のために献金をしますし、一度もあったことのない人たちのために献金をすることもあるでしょう。そして献金をするとき、それをした方も又された方も自由になることでしょう。それはいわば私たちが身代金を払って、自由の身とされるということでしょう。私たちはこの世にあって、お金というものが存在する生活を営んでいく中で、お金が、人を隷属させるためではなく、自由にさせるために用いられることを願ってまいりましょう。

この貧しいやもめは主イエスに対して身代金を払いました。それは、主イエスこそが私たち人間の為に身代みのしろとなって、私たちを贖い出し、罪を取り去って、天の国を受け継ぐにふさわしいものとしてくださったからです。人間の手で造られた聖所では、大祭司がたびたび、自分のものではない血を携えて聖所に入った、とヘブライ人への手紙には記されております。旧約時代の人間の手で作られたこのような聖所は、まことのものの写しに過ぎない、とも記されています。それでは、今の教会はどうなのでしょうか。今の教会は決して、まことのものの写しに過ぎないと言い切れるところではありません。なぜならば、教会は、キリストがただ一度身を捧げられた後、よみがえられて、今は天に居られますが、貧しいやもめのようにその名を呼び求める者に応じて、キリストに出会えるところであるからです。教会は最後の最後の完成の時まで、キリストを待望する者を呼び集め、一つの聖霊で満たし、それらの者を一つとして、全員を天の国の金銀を受け継ぐ相続人としてくださるのです。私たちは、今、天にあげられている召天者の方々とともに、そのことを喜び祝い、主に感謝と賛美を捧げてまいりましょう。

さて今日は今まで、金や銀やお金のことが多く語られましたが、実はそれよりもずっと大事な、まことのものを聖書は語っています。それに比べれば金や銀も、まことのものの写しに過ぎないのです。ではそのまことのものとは何なのかを、今日の文脈にそくして語りたいと思います。

神の民は、昔エジプトで奴隷でありましたが、神様はそのエジプトから神の民を救い出そうとされました。聖書に記されていることは、それからの神様による私たち人間の救済の歴史であります。今日のマルコ福音書の箇所でいえば、貧しいやもめは主イエスと出会って、お金による奴隷化から救われたのです。私たちはこのやもめの姿から多くのことに気づかされるでしょう。このやもめは自分の貧しい生活の現状はさておいて、このときただ主イエスにだけまなざしを向けていたのです。それは、自分の豊かさや繁栄ばかりに目を向けて、肝心の主イエスを見ようとしないお金持ちにはいつまでたっても分からないことでしょう。

私たちは教会で献金する時、よく「これを御国の為にお使いください」と祈りますが、それは自分の豊かさや繁栄を離れ、神の豊かさや繁栄に入れられることを願うのでありましょう。しかし、自分は貧しくなっても、実はそれが神を豊かにすることに関わり、神の豊かさに自分たちが入れられる道であるということは、そのように信じようとしても、時に私たちにはその信仰が揺らぐ時があるかもしれません。なぜならこの世の豊かさは、実に私たちに魅惑的に迫ってくるからです。

主イエスは、そんな私たちをこの世の仮住まいから救い出し、永遠の豊かな命に生きるようにされました。では、主イエスはどのようにして私たちを救い出されたのでしょうか。主イエスは父なる神に対して多額の身代金を支払ったでしょうか。そうではありません。そうではなくて主イエスは、十字架上で、身ぐるみはがされ、骨と皮のような姿となって、なんにもなくなって命を落とされました。しかし、それは罪人である私たちの罪を全て贖うためであり、主イエス御自身が身代となって、私たちは永遠の命に救われたのです。そうして、今は主イエスはよみがえられ天に居られて、最後のキリストの日に、待ち望む人たちに救いの完成をもたらすために現れて下さいます。私たちはその最後の救いの完成の時まで、変わらず一人の主イエスキリストのまなざしを受け続けて、見守られています。この世にあっては、私たちは、自由をもたらす献金を捧げながら歩まされています。そして世を去った後は、この世の仮住まいを離れ、神の御手に守られながら、最後の救いの完成の時を待ち望んでいることでしょう。私たちにとって主イエスのまなざしこそ、まことの救いであります。主イエスこそまことの豊かさであります。このことを信じて、永遠の命の保証人である主イエスと共に、私たちは最後まで共に歩んでまいりましょう。

お祈りいたします

憐み深い父

今日は、あなたを信じて世を去った召天者の方々一人一人を覚え、あなたのお守りに感謝する礼拝に、私たちを呼び集め、招いてくださったことに感謝いたします。私たちは、一人一人があなたによって定められたときに、あなたの身元へと旅立つことが定められています。どうか私たちがそのことを受け入れ、ますます、永遠の命が完成する最後の時を待ち望んでいくことが出来るようにしてください。

今なおこの地上を歩む私たちは、多くの苦しみや悲しみに襲われ、多くの無益なことに浮き身をやつし、多くの偶像の奴隷となっています。そのような私たちに与えられた御子キリストに依って、私たちは罪赦され安心を得ています。御子は私たちの罪を背負われ、全てを失い、自分の命までも失われました。しかし御子は私たちを見捨てることなく復活され、最後の時に、私たちの救いを完成するために現れて下さいます。どうか、そのことを私たちが最後まで信じて、歩んでいくことが出来ますよう、私たちに信仰を養ってください。

父と聖霊とともに